

『秘密の花園』論

— 母の愛の宿る庭 —

西 澤 喜代美

序

フランセス・ホジソン・バーネット (Frances Hodgson Burnett, 1849～1924) の『秘密の花園』(*The Secret Garden*) は、1911年に出版された作品であるが、90年経た今でも、世界中の多くの子どもや大人に読み継がれ、深い感動を与えている。日本では、1918年、大正7年に、岩下小葉が初めて翻訳し、『秘密の花園』のタイトルで実業之日本社から、又大正8年には田中純訳『秘密の庭』が家庭読物刊行会(「世界少年文学名作集」5)より出版されている^①。以来現在に至るまで、様々な翻訳者、挿絵家の手で新しい版が出版されている。昨年、私は新たに2冊購入した。日本語訳の方は、2000年西村書店から出版された、野沢佳織氏による完訳版で、挿絵はグラハム・ラストによるものである。もう1冊は原書でターシャ・チューダの挿絵が気に入って購入した。

『秘密の花園』は、植民地インドで孤児になった、瘦せこけて、ひねくれた「つむじまがり」のメアリが、ヨークシャー・ムーアにある伯父クレイヴンの住むミッセルスウェイト館に引き取られ、見捨てられ、荒れ果てた「秘密の花園」を見つけ、庭をよみがえらせるうちに、心身ともに癒されて、元気な可愛い女の子に成長していく物語である。又館の奥深く、世間から隠れてベッドで寝たきりの生活を送っていた、同じく母を亡くし、父にも疎まれ、病弱で歩くことも出来ない、癩癩持ちの従兄弟のコリンも、メアリに誘われ庭で過ごすうち、心も癒され、活力に満ち、自分の足で立ち、走りまわられるほど元気な男の子になっていく。この作品では庭は、二人の子どもが、社会

的に、精神的に、身体的に癒され、成長していく大切な場となっている。

館に着いた初めての朝、メアリは召使のマーサから館にはいろいろなお庭があって、一つだけこ十年間締め切られたままの庭があることを聞かされる。インド育ちのメアリは「それにしても、どうしたらお庭を閉めきるなんてことができるのでしょうか？」⁽²⁾と不思議に思う。それは日本人の読者にとっても同じなのではないだろうか。「閉じられた庭」はどんな庭なのだろうか。

そして見つけたその庭は「このうえなく美しく、なぞめいたふんいきのお庭でした。」⁽³⁾とある。「なぞめいた雰囲気」は何を意味するのだろうか。『秘密の花園』の「秘密」には、子ども達が見つめ、大人たちには秘密にしているという意味での秘密と、庭の持つ秘密の力、この二つが込められているのではないだろうか。

この小論では、この庭の持つ秘密の力を、欧米文化における「庭」の象徴性との関わりにおいて、述べてみたい。

1

作者バーネットは、庭をこよなく愛した女性である。バーネットの庭好きは、幼い頃からのものであり、彼女は庭を目で見て愛でるだけではなく、自ら雑草を抜き、苗を植え、手入れをして素晴らしい庭を造っている。最晩年の作品で死後出版されたのは、庭に対する彼女の想いと情熱を語ったエッセイ、*In the Garden*, 1925である。『秘密の花園』は、彼女の庭に対する愛情、そして自らの庭造りの経験が、そこそこに溢れた作品である。

生まれて初めて彼女が自分の本として所有したのが、祖母からのプレゼントのABCの花の絵本だった。彼女の花に寄せる愛情の原点は、この本にあったようである。さらに、バーネットが『秘密の花園』を書くにあたり、彼女に影響を与えた庭は3つあったと言われている⁽⁴⁾。

1つ目の庭は、5歳の頃、父に死なれて、家族で親戚に身を寄せていたペンドルトン (Seedley Grove, Tanner's Lane, Pendleton) で見た庭である。花々が咲き乱れ魔法をかけられたように美しく魅惑的な庭で、生涯彼女の心の中に「エデンの園」として存在し続けた。2つ目はソルフォード (Salford) で見た庭である。レンガの塀に囲まれ、何年もの間閉め切られた

『秘密の花園』論

ままたの緑色のドアの奥にある荒れ果てた、見捨てられた庭。バーネットはこの庭を見て、かつて花々が咲き乱れていた庭に想像を巡らせた。この見捨てられ、荒れ果てた庭が50年の時を超え『秘密の花園』で甦っている。3つ目は英国ケント州のロルヴェンデン (Rolvenden, Kent) にあるメイサム・ホール館 (Maytham Hall) の庭である。1898年から1907年にかけて、バーネットはこの大きな美しいマナーハウスを借りている。館には『秘密の花園』の花園のように、レンガの塀に囲まれた菜園続きに、見捨てられた果樹園があった。蔦に覆われた塀には入り口は無く、ある日友達になったコマドリが入り口を教えてくれたという。バーネットは単に庭師に命じるのではなく、自ら土を掘り、雑草を抜き、この荒れ果てた果樹園に、何百本もの薔薇や草花を植え、見事な薔薇園を造りあげた。天気の良い日には、お気に入りの白いドレスを着て、大きな帽子を被り、この薔薇園で執筆している。このメイサム・ホールの庭が『秘密の花園』を執筆する直接のきっかけになった。私としては、もう一つの庭を付け加えたい。米国に帰化し、1909年に購入したプランドーム (Plandome Park) の庭である。バーネットは、ここの庭で『秘密の花園』を執筆している。メイサム・ホールの薔薇園、プランドームの庭。庭は彼女の書斎でもあった。

バーネットは3歳で父に死に別れ、16歳で一家を挙げ米国に渡っている。若い頃から一家を支えるため書きまくり、二度にわたる結婚に失敗し、長男に先立たれ、ゴシップに悩まされ、とはいえ当時としてはまだ珍しかった、女性として精神的にも経済的にも自立した、個性的な生活を送った彼女の人生は、決して平坦なものではなかった。しかし彼女の心には、生涯幼い頃の記憶、「エデンの園」としての庭園が存在し続け、作品に、庭造りに、その想いが形になって表現されている。

キリスト教社会である欧米においては、庭は失われたエデンの園を、精神的に、又現実的に求め、再現するものである。フランシス・ベーコン (Francis Bacon, 1561~1626) が『随筆集』第3版 (*Essays*, 1625) 「46 庭園について」 ('On Gardens') で「全能の神が、はじめに庭園に植物をお植えになった。」⁶⁾と述べているように、神が造ったエデンの園が庭園の始まり、原型とされている。園の形態は旧約聖書が書かれた時代の影響を色濃く受けている。エデンの園を表すヘブライ語、ギリシャ語は、メソポタミアの「塀

で囲まれた場所・楽しみのための獵場・庭」を意味する古ペルシア語の *pairidaeza* から来ている。そしてエデンの園は「塀で囲まれた庭」と定義されるようになった⁽⁶⁾。「塀で囲まれた庭」は「エデンの園」の暗喩である。原罪を犯し、楽園を追放された人類にとってエデンの園は、人類の永遠の憧れの、神の愛の宿る至福の地で、欧米の庭園史は復楽園の歴史でもある。

『秘密の花園』の庭は、秘密のかもし出す不思議な魅力をたたえ、すべてが死んでしまったような静寂に包まれた冬の庭から、芽吹き春へと巡り行く。メアリが初めて庭へ入った時、日がさんさんと降り注ぐ、四方を塀に囲まれたこの庭から上げる空は、高い高い丸天井のような青空に見え、ムーアの上に広がっている空よりも、もっと明るくやさしげに見えた。この庭は特別な庭であることがうかがえる。メアリとディコンが訪れた春先の庭では、枯れているように見える薔薇の枝には緑の芽がふくらみかけ、地面からは球根の緑の芽が頭を出していた。そうした庭をバーネットは「その朝、秘密の花園には、地上のあらゆる喜びが満ちあふれていました。」⁽⁷⁾と表現している。又コリンが初めて庭に入り生きる力を得た庭は、つぎのように描かれている。

コリンはその日、秘密の花園に入ったときに、それ（永遠の命）を感じました。四方を高い塀にかこまれたお庭で、はじめて春を目のあたりにし、その音を聞き、いぶきにふれたときに、自分はいつまでも生きるのだと確信したのです。その日の午後、コリンというひとりの少年にとって、世界は一点のかげりもなく、まばゆいばかりに美しく、かぎりなくやさしいものに思われました。まるで神様 (pure heavenly goodness) のはからいで、この庭に春がおとずれ、あらゆるすばらしいものが一か所にそそぎこまれたようでした⁽⁸⁾。()は筆者加筆

「地上のあらゆる喜びが満ちあふれた庭」、「永遠の命」を感じさせる庭、生きる確信をコリンに与えてくれた「世界が一点のかげりもなく、まばゆいばかりに美しく、かぎりなくやさしいものに思われる庭」は、「塀で囲まれた庭」である。この秘密の庭は「エデンの園」をイメージして描かれ、さらには「エデンの園」そのものであった、といつて良いだろう。

メアリはインドで暮らしていた頃、両親は彼女には関心を示さず、遊ぶ友達もいないので、1人でお庭を造って遊んでいた。小さな土の山をいくつもこしらえ、真っ赤なハイビスカスを1本ずつ挿した花壇だった。そして、孤児になったメアリは、イギリスの伯父の館に引き取られるまで、イギリス人の牧師の家に一時預けられた。しかし彼女は牧師や牧師の子ども達と決して打ち解けず、ここでも彼女は、ひとりで庭を造って遊んでいた。子ども達は、そんなメアリをはやしだてて歌う。

つむじまがりのメアリさん	Mistress Mary, quite contrary
お庭のようす、いかがです?	How does your garden grow?
銀のベルに、貝のから	With silver bells, and cockle shell
それにきれいなキンセンカ	And marigolds all in a row
ずらりならんで、咲いています ⁽⁹⁾ 。	

マザー・グースの唄である。牧師の子ども達の目には、顔色は黄色く、やせこけ、黄色い髪の毛は少ししかなく、いつも、しかめ面をしていて、無愛想な彼女は、まさに、「つむじまがりのメアリさん」に見えた訳である。『秘密の花園』は最初 *Mistress Mary* というタイトルで発表され、この唄が基調となっている。「つむじまがりのメアリさん／お庭のようす、いかがです?」と作品を通して語りかけてくる。

マザー・グースの「つむじまがりのメアリさん」は英語では“Mistress Mary, quite contrary”である。『秘密の花園』を翻訳された日本語で読むと、その同一性に気が付きたいが、「メアリ」は英語では Mary であり、聖母マリアも英語では the Virgin Mary である。

The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes によれば、この唄の版は色々あり、又その解釈には、メア리를聖母マリアとする説、スコットランドの女王メアリとする説など、諸説あるが⁽¹⁰⁾、夏目康子氏は、『秘密の花園』とのかかわりにおいては、メア리를聖母マリア (the Virgin Mary) とする説を

とっている。「Mary が contrary であるというのは、処女でありながらキリストを孕むという contrary な状況と一致する。」⁽¹¹⁾ というのである。マザー・グースの「つむじまがりのメアリさん」のメアリは、主人公のメアリと聖母マリアのお庭を拝見しましょうと言う掛詞になっているといえる。更に「聖母マリア」と「庭」。この二つの語が結びつくと、キリスト教では単なる庭ではなく、特別の庭が連想される。

まず、マリア信仰についてであるが、竹下節子氏は、次のように述べている。

人間は、どんな宗教的環境においても大地母神的なキャラクターを必要としている。男性的一神教であるユダヤ教の流れをくむキリスト教が、女神の林立していたギリシャ・ローマ世界に根付いて世界宗教として発展していった過程で、聖母マリアの果たした役割は大きい。マリアは「豊穡の大地母神」、「巫女＝処女神」という、一見矛盾した神性を一身に体现するだけではない。無実のわが子を殺された母という試練の存在として、子供の死亡率の高かった時代の人々の心の支えとなった。また、独身制を義務づけられた聖職者にとっては永遠の女性像となり、産褥死が多く孤児の多かった時代の人々には母のイメージを提供した。もちろん信者の祈りを神にとりつぐ大いなる仲介者、ヒーラーとしての側面も大きい⁽¹²⁾。

聖母マリアと庭についてであるが、初期キリスト教では「楽園」はキリスト教会を表していたが、中世になると教会の外に「楽園」を見かけるようになる。瞑想や祈りのための閉ざされた空間・修道院の庭である。そして「雅歌」第4章12節の、

わたしの妹、花嫁は、閉ざされた園。

閉ざされた園、封じられた泉⁽¹³⁾。

から、処女聖母マリアは「閉ざされた庭」とされたのである。聖母マリアは「楽園」・当時の小さな囲まれた修道院の庭園と同一視されるようになった。

「閉ざされた庭」は、「聖母マリアご自身」の隠喩、あるいは「聖母マリアの宿庭・楽園」を表す。更には「囲まれた庭であるエデンの園」と「閉ざされた庭である聖母マリアの庭」が同一視されるようになり、「囲まれた庭園」、「閉ざされた園」、そして花や木は、キリスト教信仰の寓意となる。

中世の庭として良く引用される庭の絵は次の二点であろう。一枚は1460～80年頃描かれたゲルンハウゼンのマリア教会蔵の「マリアの庭」である。閉ざされた庭にマリアが座し、キリストの象徴とされる一角獣を抱いている。もう一枚は1410年ごろ描かれたとされる「上ライン地方の画家」による「小さな楽園の庭」である。閉ざされた庭で聖書を読む聖母マリア、音楽を奏でる幼子と母、生命の木と泉、天使が描かれている。更に庭には、薔薇、百合、リコリス、ゼニアオイ、アイリスなどが描かれている。薔薇は聖母の敬虔さを、白百合は聖母の純潔を連想させ、受胎告知と被昇天を表すとされる。又薔薇はとげの間で花を咲かせることから、キリストを退けたユダヤ人として生まれ育ったマリアに対する神の奇跡を象徴するとも言われている。フランス王の象徴であるアイリスは、キリストがダビデ王の系譜を継ぐことを明らかにすると共に、王としてのキリストを意味し、三つに分かれたいちごの葉は、三位一体の神秘を想起させるものとされる⁽¹⁴⁾。

『秘密の花園』の「塀で囲まれた、閉ざされた庭」は聖母マリアの慈愛に満ちたこの庭を連想させるのである。聖母マリアの愛に包まれ、庭で音楽を奏でて遊ぶ母子の姿は、母リリアスとコリンが遊ぶ姿と重なり合う。

母性愛に満ちた庭に関して言えば、実を結ぶ豊穡の大地・庭は古米母性に例えられている。その一例として、18世紀の古典派の詩人ポーブの庭を上げることが出来る。アレクザンダー・ポーブ（Alexander Hope, 1688～1744）は、ロンドンの郊外テムズ河畔のトゥイクナムに、25年間に渡り精魂をかけて、約2万平方メートルの庭を造っている。彼は庭の一番奥まった地点に、亡き母の霊に捧げたオベリスクを立てた。川崎寿彦氏は原始時代から庭を支配する地霊は常に一人の理想化された女性であり、ポーブの庭では、花に囲まれたマリアやヴィーナスの代わりに、母の霊が慈愛に満ちた眼差しを注いでいた、と述べている⁽¹⁵⁾。

秘密の花園も、母・リリアスの慈愛に満ちた霊が宿っている庭である。

「クレイヴンの奥様は、お若くてとても美しい方だったそうだよ。でね、母さんは言うんだ。あの方はたびたびミッセルスウェイト屋敷に来て、コリン坊ちゃんを見守ってらっしゃるんじゃないかならうかって。母親っていうものは、世を去るとかならず、そうするんだって。子どものもとへ、もどって来ないではいられないだって。もしかしたら、クレイヴンの奥さまは庭にいらして、おれたちに庭仕事をさせて、コリン坊ちゃんをここへつれて来るようにしむけたんじゃないかな」⁽¹⁶⁾

と、ディコンは庭の秘密をメアりに語っている。リリアスの死後も子を思う心は、霊となってこの庭に宿り、子ども達を庭へと誘い、癒し、心身ともに元気な子どもにしたのである。この庭はただの庭ではなかった。「このうえなく、なぞめいたふんいきの庭でした。」とあるのは、この庭は「聖母マリアの庭」であり、母リリアスの愛の霊が宿っている庭であったからである。

以上述べた庭はアガペーの庭であるが、更に庭について言えることは、古来囲まれた「世俗の庭」はエロスの庭であり、囲まれた小空間は愛する恋人達が、愛を語らう場所でもあった。リリアスは、庭造りが大好きで、ミッセルスウェイト館のレンガの塀で囲まれた庭に、薔薇や、四季折々美しい花の咲く木や草花を植え、愛する夫クレイヴンと、二人だけの愛の時を過ごしている。彼女を失ったあまり、10年の歳月を悲嘆に暮れて過ごす夫クレイヴンをも、彼女の庭へと誘うのである。

「閉ざされた庭」は聖母マリアの庭であり、さらには母性そのものを象徴する愛の庭であったといえる。

3

この秘密の花園は聖母マリアの庭であり、コリンの亡くなった母の愛が宿る庭であるならば、聖母マリアはどのように、描かれているのだろうか。母性についてどのように描かれているのだろうか。この物語には三人の母親が登場する。メアリの母と、コリンの母、そしてマーサとディコンの母さん、スーザン・サワビィである。

メアリの母は、背がすらりと高く、とても美しい人であったが、子どもに

は全く興味が無く、着飾ってパーティを楽しむことしか頭には無い。メアリにとって母親は、大好きな人という感情を感じる以前の、遠くから眺めるだけの存在だった。彼女は美しい母親を、植民地の召使が母親を呼ぶように、メンサヒブと呼び、母がコレラで死んでも、悲しいという感情すら湧かない。両親が死んでしまって、牧師の家に預けられたりして、初めて他所の子達はお父さん、お母さんの子どもなのに、自分は誰の子どもでもないと感じる。メアリは母親の愛情を知らないで育ち、そして永遠に母親を亡くしてしまった。

コリンも又、母の愛情を知らないで育った子どもである。コリンを身ごもっていた母は、秘密の花園の大枝から落ちて大怪我をして、コリンを生むと間もなく亡くなってしまった。コリンは自分を置いて死んでしまった母を、時に憎み、心から締め出している。父クレイヴンは、愛する妻を失ったあまり、コリンを避け、彼を召使にまかせきりにしている。

物質的には何不自由無く育てられているが、何よりも大事な親の愛情に恵まれない、母とはどんな存在かという事も知らないで育った二人に、マーサとディコンの母さんは、細かく母親としての気配りをしてくれる。マーサやディコンが「母さんが言ってたよ。」という形で、母の愛とはどんなものなのか、二人に伝えられる。子どもにとって、親に生まれてきて欲しくなかったと思われるほど、不幸なことはない。望まれない子どもは、生き延びるのがむずかしい、というディコンの母さんの言葉は、メアリとコリンのかかえる悲劇の本質をずばりと捉えている。二人は彼女に会う前から、彼女を慕っている。二人の子どもは母性愛というのはどういうものなのかを、彼女を通じて知るのである。

『秘密の花園』には二つのクライマックスがある。最大のクライマックスは、勿論元気になったコリンが、父クレイヴンの胸に飛び込んでいく最後の場面である。そしてもう一つのクライマックスは、コリンが秘密の花園で元気になった事を強烈に確信する瞬間、そして子ども達の前にディコンの母さんが初めて姿を現す瞬間はないだろうか。

「ぼくはいつまでも、いつまでも生きる！……ぼくは元気だ！ぼくは元気なんだ！ああ。なんだか……さげびたい気分だよ。うれしくて、ありがたくて、たまらないんだ！」⁽¹⁷⁾とコリンは感極まって叫ばずにはいられなかった。

そうしたコリンに、庭師のベン・ウェザースタッフは、「そんなら、賛美歌を歌ったらどうかね」と提案する。教会に行ったことのないコリンは賛美歌（頌栄）を知らない。ディコンの指導のもと、皆は立ち上がり、帽子を取る。そしてディコンは、少年らしい力強い美しい声でうたう。

たたえよ、恵みあふるる神を
たたえよ、なべての生きものよ
たたえよ、天なるみつかいたちよ
たたえよ、父と子と聖霊を、アーメン⁽¹⁸⁾

そして、コリンは賛美歌が自分の気持ちをまさに表現していることに感動し、子ども達三人は、もう一度皆で歌う。まさに神への賛美、感謝の気持ちが自然に湧き上がった時、ディコンの母は静かに秘密の花園に入ってくる。しかし彼女の出現は貧しいおかみさんのスーザン・サワビィ個人というよりも、聖母マリアを想わせる。

ツタを背にして立っているその人は、新緑の草木のむこうで、やさしくほほえんでいました。木の葉ごしにさしこんでくる日の光で、青いうわばりがまだらもように見えます。どことなくコリンの本に出てくる、やわらかな色合いのさし絵を思い出させるすがたでした。その人は、とても愛情深い目をしていて、どんなものでも、どんな人でもーベン・ウェザースタッフも、「生き物たち」も、咲きほこっている花たちまでも、すべて受けいれてくれそうでした。そして、思いがけずとつぜんあらわれたにもかかわらず、だれの目にも、お庭の平和をみだす侵入者とはうつらなかつたのです⁽¹⁹⁾。

ディコンの母は、ムーアの端の小さな家に住む、ヨークシャー訛りで話す貧しい一家の母親であるが、神々しさを感じさせる。「とても愛情深い目をしていて、どんなものでも、どんな人でも……すべてうけいれてくれる」⁽²⁰⁾人、聖母マリアのやさしい慈愛を思わせる。「賤の女をば、母として生まれたもうイエス、君よ」という賛美歌にあるように、聖母マリアも決して王侯

貴族出の貴婦人ではなかった。

コリンとメアリは、ディコンの母さんのにこやかな薔薇色の顔を見あげていると、この人といると、なぜこんなにうれしくなるんだろう、しっかり守られているようなあたたかい気持ちになるのはどうしてだろうと思う。そしてディコンの母さんが、本来であれば、土地の慣習に習い「コリン坊ちゃま (Mester Colin)」と呼ぶべきであるにもかかわらず、コリンを「可愛い子 (dear lad)」⁽²¹⁾と呼び抱きしめるのは、彼女が聖母マリアに昇華しているからに他ならない。

この庭が聖母マリアの庭であり、ディコンの母さんが聖母マリアであるならば、キリストは何処にいたのであろうか。イエス・キリストのイメージはディコンと重なり合う。彼は動物、小鳥、植物と友だちで、彼らの言葉を理解し、誰からも愛され信頼されている、心優しい少年である。ディコンは、ムーアで母親に死に別れた子羊の弱々しい鳴き声を聞くと、ハリエニシダの茂みを出たり入ったりし必死に探し、ようやくムーアの一番高い所にある岩陰にいる子羊を見つけて助ける。イエスが99匹を残して、高い岩棚に迷い込んでしまった一匹の子羊を探す姿を髣髴させる。

『秘密の花園』のモデルになったメイサム・ホールは、穏やかな南のケント州にあるが、ミッセルスウェイト館はヨークシャー・ムーアのはずれにある。荒涼としたムーアを馬車に乗って館に向かう場面は『ジェーン・エア』(Charlotte Bronte, *Jane Eyre*, 1847) との類似性が指摘されている。孤児のメアリとジェーン、館の奥に住むコリンの泣き声と狂ったロチェスター夫人の笑い声、鬩りのあるクレイヴンとロチェスター⁽²²⁾。確かに指摘される通りであろうが、『秘密の花園』では、ムーアには、特別な意味が込められているのではないだろうか。キリスト教ではエデンの園の外にある荒野には重要な意味合いがある。荒野において、キリストの救いが成就されたのである。荒涼とした冬のムーアから、春のムーアへと時は移るが、春を迎えたムーアは、救いの成就の喜びの序章が始まったことを想わせる。

4

以上、キリスト教文化を背景にして、『秘密の花園』における庭のもつ象

徴性について、また庭に宿る秘密について述べてきたが、ここでこの論を終えてしまうのは、この作品の解釈としては、片手落ちと言える。つまり、この作品は単純なキリスト教の神の愛、聖母マリアの奇蹟の物語として描かれてはいないという事を述べる必要がある。

この庭に不思議な力が宿っていたのは、この庭が単なる庭でなく、エデンの園であり、母の愛が宿る聖母マリアの庭であったという事が言えるが、バーネットはその不思議な力を、大文字の M で始まる Magic・魔法と表現し、この作品を魔法の力で不思議なことが起きたフェアリー・テイルとして描いている。ふしぎな魔法の力が宿っているのは、勿論、庭であるが、コリンを庭へと導くメアリ、ディコン、ディコンの母、そしてコリンの母にも魔法の力が宿っている。

又、魔法の力は、風、月の光、コマドリといった自然にも宿り、子ども達を庭へと導いている。秘密の花園の鍵のありかをメアりに教えてくれたのは、コマドリで、さらにはコマドリは、その入り口をも教えてくれる。コマドリが塀の上でさえざると、小道に気持ちのいい風が吹き降ろしてきて、塀にたれさがっている伸び放題の蔦をふわっと持ち上げ、その瞬間、メアリは垂れ下がっている葉っぱの陰に、丸いドアの取っ手を見つける。インド育ちの魔法を信じているメアリは、この瞬間に起こったことこそ魔法に違いないと、後から良く思い返している。

蔦のカーテンに隠れた秘密の花園の入り口を見つけられたのは、コマドリと一陣の風によるものだった。そして、もう一陣の風、今度はもっと激しい風である。窓に激しく叩きつける雨、ムーアを吹き荒れる風のうなる音でメアリは寝られなかった。メアリは風のうなる音と重なるように聞こえてくる泣き声を頼りに、ミッセルスウェイト館の奥深くで、寝たきりの生活を送っていたコリンを見つける。メアリとコリンの出会いは風が引き合わせてくれたものだ。

そして、コリンの母は月の光となって現れる。勿論、月は、女性なるもののメタファーである。コリンは、部屋に掛かっている母の絵にカーテンを掛け見えないようにしていたが、月の明るい夜中にふと目が醒めると、部屋は魔法が満ちているようになにもかも輝いていて、絵に掛かっているカーテンに月光が差している。コリンがカーテンを開けると、彼女は、コリンが立っ

『秘密の花園』論

ているのを見て、ニコニコして、喜んでいるように見えた。コリンが母親を受け入れた瞬間である。

この月の光はコリンのみならず、元気になったコリンに会いに帰るようにと、コモ湖の湖畔にいる夫クレイヴンのもとを訪れる。湖畔には満月の月が昇り、あたり一面は紫色と銀色に包まれていた。そして月の光と、ふしぎな静けさに包まれ、眠ってしまった彼の夢のなかに、薔薇の香りと共にリリアスの声がある。「アーチャー！アーチャー！」と彼を呼ぶ声に、「リリアス！何処にいますか？」と呼び返すと、「お庭よ！お庭にいるの！」と金のフルーツのようなリリアスの声が返ってくる。

しかし、最大の魔法は、コリンに生きる力を与え、自分の力で立ち上がり、歩けるようにしてくれた庭の魔法である。

ぼくは、ずっと心の中でつぶやいていた。『このふしぎな力は、いったいなんだろう？』って。それは何かなんだ。なんでもないわけがない！でも、名前はわからない。だから、『魔法』と呼ぶことにした。……あらゆるものは、魔法によってつくられたんだ。葉っぱも木も、花も鳥も、アナグマもキツネも人間も。……⁽²³⁾

そして、コリンがディコンの母さんに、魔法について語ると、彼女は、

「それを魔法って呼んだことはないけど、名前なんてたいした問題じゃないもの。フランスやドイツじゃ、きっと違った呼び方をするんだろうしね。種を膨らませたり、お日様を照らしたりしているのと同じ、ふしぎな力が、坊ちゃんを元気な子にしてくれたのよ。それは、『よきもの』なの。『よきもの』は、あたしたちみたいなおろか者とちがって、ちがう名前と呼ばれたからって、気になんかしないのよ。『大きなよきもの』は、そんなことで手を休めたりはしないの。ずっとずっと、たくさんの世界をつくりつづけるの……あたしたちがすんでいるような世界をね。だから、『大きなよきもの』を信じつづけて、世界はそういうもので満たされてるって思えばいいの。あとは、それをなんて呼ぼうとかまやしないのよ。あたしが入ってきたときも、みんなして、それにむかっ

て歌ってたじゃないの」……『魔法』は聞いてくれたはずよ。坊ちゃんの歌う賛美歌を。……大事なのは、喜びを伝えることなんだから。『魔法』っていうのは、『喜びをつくりだすもの』のことだと思うけど、名前なんかどうだっていいわ。ね、そうでしょ？」⁽²⁴⁾

と、コリンの魔法についての考えを肯定している。キリスト教では、世界を創り、創り続けるもの、よきもの (the Good Thing)、大きなよきもの (the Big Good Thing) と呼ばれる存在は、天と地とあらゆる生き物を創造した大文字の神、魔法は「神の愛」であるといえるが、バーネットは、敢えて神という言葉を使わない。ただメアリとコリンは教会に行っていたことがないので、賛美歌を知らなかったという事、コリンの身に奇蹟が起こったことを感謝し、子ども達と一緒に賛美歌を歌った庭師のベン・ウエザースタッフが、感涙を流し、「今まで、賛美歌なんぞたいした意味はないと思っていたが、考えを変えんといかんようじゃ。」⁽²⁵⁾と嗚れ声でつぶやいている姿を描いて、間接的にキリスト教の神の存在について、ほのめかしている。

バーネットの信仰に関して言えば、イギリスにいる間は英国国教会に通っていたが、アメリカに来てからは、教会に通うことはなかった。しかし聖書は読み続け、彼女の聖書には、そこここに書き込みがされている⁽²⁶⁾。又、精神的に落ち込んだ1884年頃ボストンで、クリスチャン・サイエンスに接近した一時期があったが、帰依していない。コリンの科学的実験や、最後の章の初めに述べられている、心の病と、体の病の関連性、人の思いや考えに電気にも負けない強さがあるという考え方に、クリスチャン・サイエンスの影響が指摘されている⁽²⁷⁾。

この作品は、正統なキリスト教の見方からすれば、異教的な要素も多く見られる作品になっている。Phyllis Bixlerは、笛を吹き、動物達や木や花と話すことのできるディコンは、パンを想わせるし、秘密の花園に姿を現したディコンの母は、多分聖母マリアでもあるだろうが、木々に縁取られ、彼女の着ている「木の葉ごしに差し仕込んでくる日の光で、青く見えるうわっぱり」の色から、異教の大地母神、豊穡の女神を想わせる、と述べている⁽²⁸⁾。

しかし、神という言葉は使われていなくても、作品を通して確かに読み取れるのは、美しい自然を創られた創造者・神への賛美と、人間を創られた方

『秘密の花園』論

の、愛に飢えた小さきものへの、溢るるばかりの愛である。19世紀後半は、神による天地創造を覆すダーウィンの「進化論」が発表され、キリスト教信仰において大きな変化がもたらされた時代であった。

結 び

子ども達は庭を手入れすることで体を動かし、太陽を浴び、ムーアをわたって吹く風、新鮮な戸外の空気を吸い、土の香りを嗅ぎ、花や木々の香りを楽しみ、その美しさを愛で、植物の成長力に活力をもらう。しかし子ども達が心身ともに元気な子どもに成長したのは、単に今流行りの、森林浴等で象徴される自然の治癒力のみによるものではなく、その背後に存在し、子供たちを見守る、自然と人間を創られた全能の神の限りない愛によるものであると言えよう。マリーオ・ヤーコビは、「最も広義での「自然」としてのグレートマザーの元型は、万物が育成し繁茂する楽園の庭のかたちで象徴されるが、その背後にはしかし、壮麗なる自然全体の創造者、指示者の声が響いている。」⁽²⁹⁾と述べている。西欧文化においては、庭は場所として存在するだけではない。バーネットは、「聖母マリアの庭」のイメージを巧みに使い、ふしぎな魔法の力を持つ美しい庭に現実感を持たせ、コリンの亡き母の母性愛の宿る庭の奇蹟の物語を描いている。『秘密の花園』で描かれている、四季を巡る庭の、そして自然の美しさ、永遠の憧れである限りない母の愛は、子ども達をそして大人をも癒してくれる。

バーネットは、『秘密の花園』では、既成の信仰という枠を越え、自分の言葉で彼女の信仰、自然への賛美、自然を創った創造者への賛美を歌っている。『秘密の花園』は、ヴィクトリア朝の美德、子ども達が善良で、大人の言い付けを守り、敬虔なキリスト教徒として神の教えに従う、といったパターン化した子ども像から脱却し、人間的な子どもらしい子どもが描かれた作品として、児童文学史上で評価される作品である。J.R. タウンゼントは、こうした時代を変える作品が生まれるには「誰か、単純なキリスト信者でない、ホジソン・バーネット夫人のような人を必要としたのであろう。」⁽³⁰⁾と述べているが、子ども像のみならず、世界の有り様においても、ヴィクトリア朝的パターン化されたキリスト教的世界像に囚われず、バーネットの自身の言

葉で描いたところに、90年経った現代でも尚、古さを感じさせずに、異文化社会においても、魅力ある作品として読み続けられているのであろう。

《注》

- (1) 清水真砂子、八木田宣子共著『英米児童文学翻訳年表』研究社、1972年、61頁。
- (2) Frances Hodgson Burnett, *The Secret Garden*, 1911, London: Penguin Books, 1995, p. 36.
- (3) *ibid.*, p. 75.
- (4) Ann Thwaite, *Waiting for the Party – The Life of Frances Hodgson Burnett 1849–1924*, Boston: David R. Godine Publisher Inc., 1991, pp. 8–9, 182.
- (5) フランシス・ベーコン『隨筆集』成田成寿訳、中央公論社、1970年、203頁。
- (6) Mircea Eliade ed., *The Encyclopedia of Religion*, New York: Macmillan Publishing Company, 1987, p. 184.
- (7) *ibid.*, p. 148.
- (8) *ibid.*, p. 201.
- (9) *ibid.*, p. 14.
- (10) Iona and Peter Opie, *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*. new edition, Oxford: Oxford University Press, 1997, p. 301.
- (11) 夏目康子「“Mary, Mary, Quite contrary” を読む—聖母マリアから『秘密の花園』まで—」『英語圏児童文学研究 Tinker Bell』No. 47, 日本イギリス児童文学会、2002年、22頁。
- (12) 竹下節子『聖母マリア〈異端〉から〈女王〉へ』講談社、1998年、6–7頁。
- (13) *The Revised English Bible with Apocrypha*, Oxford Univ. Press and Cambridge Univ. Press, 1989, p. 584.
My sister, my bride, is a garden close-locked,
A garden close-locked, a fountain sealed,
- (14) J. プレスト『エデンの園 楽園の再現と植物園』加藤暁子訳、八坂書房、1999年、36–41頁。
- (15) 川崎寿彦『庭のイングランド』1983年、名古屋大学出版会、1989年、300頁。
- (16) *ibid.*, p. 204.
- (17) *ibid.*, p. 253.
- (18) *ibid.*, p. 254.
- (19) *ibid.*, pp. 255–6.
- (20) *ibid.*, p. 256.
- (21) *ibid.*, p. 256.
- (22) *Waiting for the Party*, pp. 220–1, 或いは、Peter Hunt, *Children's Literature*, Oxford: Blackwell Publishers Ltd., 2001, p. 212.
- (23) *ibid.*, p. 223.

『秘密の花園』論

- (24) *ibid.*, pp. 258-9.
(25) *ibid.*, p. 255.
(26) *ibid.*, p. 88.
(27) *ibid.*, p. 221. 或いは, Phyllis Bixler, *The Secret Garden—Nature's Magic*, New York: Twayne Publishers, 1996, p. 73.
(28) *ibid.*, pp. 71-2.
(29) マリオ・ヤコービ『楽園願望』紀伊国屋書店, 1989年, 23, 165頁。
(30) John Rowe Townsend, *Written for Children*, 1965, Maryland: Scarecrow Press Inc., 1996, p.63.

Text: Frances Hodgson Burnett. *The Secret Garden*. 1911. London: Penguin Books, 1995.

日本語訳: 野澤佳織訳『秘密の花園』西村書店, 2000年。

引用文献

- The Revised English Bible with Apocrypha*. Oxford Univ. Press and Cambridge Univ. Press, 1989.
Bixler, Phyllis. *The Secret Garden—Nature's Magic*. New York: Twayne Publishers, 1996.
Eliade, Mircea ed.. *The Encyclopedia of Religion*. New York: Macmillan Publishing Company, 1987.
Hunt, Peter. *Children's Literature*. Oxford: Blackwell Publishers Ltd., 2001.
Opie, Iona and Peter. *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*. new edition. Oxford: Oxford University Press, 1997.
Shirley Carpenter, Angelica and Jean. *Frances Hodgson Burnett—Beyond the Secret Garden*. Minneapolis: Lerner Publications Company, 1990.
Thwaite, Ann. *Waiting for the Party—The Life of Frances Hodgson Burnett 1849-1924*. Boston: David R. Godine Publisher Inc., 1991.
Townsend, John Rowe. *Written for Children*. 1965. Maryland: Scarecrow Press Inc., 1996.
川崎寿彦『庭のイングランド』1983年, 名古屋大学出版会, 1989年。
清水真砂子, 八木田宣子共著『英米児童文学翻訳年表』研究社, 1972年。
竹下節子『聖母マリア〈異端〉から〈女王〉へ』講談社, 1998年。
夏目康子「“Mary, Mary, Quite contrary”を読む—聖母マリアから『秘密の花園』まで—」『英語圏児童文学研究 Tinker Bell』No. 47, 日本イギリス児童文学会, 2002年。
マリオ・ヤコービ『楽園願望』松代洋一訳, 紀伊国屋書店, 1989年。
フランシス・ベーコン『隨筆集』成田成寿訳, 中央公論社, 1970年。
プレスト, J.『エデンの園 楽園の再現と植物園』加藤暁子訳, 八坂書房, 1999年。

A Study of *The Secret Garden*

—The Garden of Motherly Love—

Kiyomi Nishizawa

Abstract

In the story the secret garden has a double meaning. One is, of course, the children keep the garden secret from adults. Another is the garden has secret magical power. How can the garden have this power?

The word paradise originated from Old Persian *pairidaeza* which meant walled enclosure, pleasure park, garden. When Genesis was translated into Hebrew, Aramaic and Greek, the Garden of Eden was defined as a walled and enclosed garden. The secret garden is enclosed by a brick wall. It is modeled the Garden of Eden and becomes the Garden of Eden itself with its attributes.

Mary is nicknamed 'Mistress Mary, quite Contrary'. The phrase comes from a nursery rhyme which suggests Mistress Mary is the Virgin Mary. In the Middle Ages, the Virgin Mary was compared to a closed garden. A closed garden has become a metaphor of the Virgin Mary. The secret garden has been closed for ten years. It suggests the garden is the garden of the Virgin Mary. She is a symbol of all maternity, so Colin's mother stays in the garden as a spirit after her death and invites the children to her.

The secret garden is the Garden of Eden and the Virgin Mary stays there, so the garden has magical power. Mrs. Burnett used these metaphors skillfully and wrote this story not as a religious miracle story but as a magical fairy tale, so we still enjoy reading it.